

イランの学校外教育施設における国際理解教育

—「青年と子どもの知性開発センター」の活動を中心に—

ノールーズイ・ヘデイエ

はじめに

公教育の場において国際理解教育を推進することは重要であると筆者は考える。しかしながら、本稿で事例として取り上げるイランの公教育において、国際理解教育に相当する授業は、生徒たちに必ずしも有効な影響を与えることができないと言える。なぜならば、社会科は、他国の状態について、単に地理の教科書に載っている知識を習得することに重点を置き過ぎているからである。そのため、イランの子どもたちはその国の人々が実際にどのような生活をしているのかについて学ぶことができず、断片的な情報のみを与えられているにすぎない。

このような状況の中で、1966年にイランの社会に設立された、青少年のための学校外教育施設である「青年と子どもの知性開発センター (كانون پرورش فكري كودكان و نوجوانان) (IIDCYA : Institute for Intellectual Development of Children and Young adults)」(以下「知性開発センター」と記す)は、子どもたちに学校以外の教育を行うパイオニア的存在である。知性開発センターが設立される以前のイラン社会には学校外教育の施設は存在しなかった。この初めての試みは少しずつ実績を積んでおり、現在では、イランにおける唯一の国際理解教育実践の施設としての道を歩んでいる。知性開発センターでは自文化(特にイランのよいイメージや豊かな文化)をヨーロッパ諸国に紹介する一方で、生徒たちにヨーロッパの文化への理解を促すといった相互交流的な活動が続けられている。

しかしながら、諸外国から見たイランのイメージはステレオタイプなものが多い一方で、イランの子どもたちも他国に対しての情報が不足している。今後、メディアによって報道される戦争や核開発問題などのネガティブで断片的なイメージを伝えるだけでは、各国の交流の妨げになる恐れがある。したがって筆者は、イランの伝統的な慣習・文化、長い歴史を持つ文明・技術など、イランの豊かな側面について国際社会に伝え、理解を促すためには、知性開発センターの活動を紹介・検討することが必要であると考えた。

現在、知性開発センターにおいて交流活動として実施されているヨーロッパ諸国とのプログラムは、センターの諸活動をよく認識した上で行われている。このようなヨーロッパ諸国とイランをつなぐパイプ役となる知性開発センターの活動は、イランの子どもたちにとって、唯一の国際交流の手段であるとも言える。日本では国際理解教育が多方面において実践されているだけでなく、それぞれの活動

について紹介されているが、イランの知性開発について紹介されているものはほとんど見当たらない。したがって、今後、知性開発センターの存在や活動内容が日本において知られることには意義が認められる。また、日本の学校とイランの知性開発センターが交流することができれば、お互いの偏見を取り除くことが可能となり、日本とイランの友好関係の構築にも寄与していくであろう。以上の観点から、本稿では知性開発センターの存在意義と価値が何であるのかについて明らかにしていくこととする。

本稿ではまずイランの知性開発センター設立の背景と歴史、管理体制などについて述べるとともに、イランの現在の学校教育制度の問題点についても考察する。次に知性開発センター内で行われている実践の全体像をつかむために、「イスラム文化を継承するためのプログラム」「創作・創造性を育むプログラム」「世代間交流を行うプログラム」「国際的な活動」の4点について分類し検討する。そして最後に、「国際的な交流」に関係する大きな活動事例を三つ検討していきたい。

1 イランにおける知性開発センター設立の背景と目的

(1) 知性開発センターの概要

知性開発センターは、イラン革命⁽¹⁾以前の1966年に、子どもたちの知性と創造力を発達させ、余暇活動を豊かにすることを目的として設立された文化財団法人である。イラン革命以降、知性開発センターの活動は、イラン教育省によって管理されている。知性開発センターの主な役割は、読書と視聴覚教材を通じて創造力を育み、彼らの道徳的な精神を養うことである。2003年の統計によると、イラン国内の知性開発センターの数は637である。イラン全国の学校数は52,314校であるため、学校1000校に対して12の知性開発センターがあることになる。また、同年のイラン全国の生徒数は1,724万5,606人であり、知性開発センターに通う子どもたちは31万4,890人であることから、生徒1,000人のうち18人が知性開発センターへ通うという計算になる⁽²⁾。

(2) 学校教育の役割補完

知性開発センターが開設される以前、イランの社会や学校には、知性開発センターのような施設子ども向けの図書館は非常に少なく、幼稚園や小学校、高校などの図書館もごくわずかであった。また、学校教育ではいわゆる知識詰めこみ型の教育が重視されていたため、音楽・美術・図工などの芸術分野に関する教育を充分に行うことは困難であった。しかし、子どもの豊かな能力を育むための芸術的な活動、子どもたち同士で学んでいく活動を取り入れたプログラムのニーズが次第に高まり、子どもの余暇活動を促進する機関として知性開発センターが発足することとなった。

知性開発センターが設立目標を達成するために最も重要視したのは、図書館の普及である。まず首都テヘランや地方の町に住んでいる青年と子どもたちのために図書館を設立した。知性開発センターの第一の図書館はテヘランにある旧ファラフ公園⁽³⁾に建てられた。しかし、その図書館だけでは、すべての子どもの余暇活動を豊かにするには充分でないということが明らかになり、市の中心部から

離れた場所にも設立されるべきだということになった。このようにして、中心部から離れた場所として、バグシャ⁽⁴⁾にある学校の地下室を使って活動が始められた。しかし、ここでは、地方の子ども的人数が少ない上に、利用されない本も多かった。それゆえ、知性開発センターは、有用な文化資源を無駄にしないために新しい計画が必要となり、地方の移動式図書館において、他の地方の図書館と本を交換する活動を始めた。1966年、最初の移動式図書館は都市や郊外の30の小学校で本を貸し出した。移動式図書館は学校だけでなく、毎月テヘランの多様な病院と教護院の子どもにも本を供給した。加えて、地域の人々に不足している本を移動式図書館で供給したり、公共図書館に子どもたち向けの読書コーナーを設けたりした。また、さらなる図書館の機能の充実を目指して、教育省と文化・芸術省が協力して視聴覚教材の利用を促した。特に、青少年向けの映画を購入し各学校に分配した。また、青年と子どもに最も役立つ本を供給するために、作家と挿絵と映画、出版業者を経済的に援助した。加えて、視聴覚教材をよりよい方法で利用するために、専門家に研究・実験をさせ、子どもたち自身にも映画を作らせるなどの活動を行った。

(3) 知性開発センターの授業料

テヘランは大都市であり、また特別な活動を多くしているため、テヘランの知性開発センターは地方の知性開発センターよりも授業料が高くなっている。例えば、テヘランの知性開発センターの授業料は、2ヶ月おきに100,000リアル（日本円で約1,200円、一週間に1回通うことを基本として10回分）であるが、地方の場合は80,000リアル（1,000円）である。個々の作業スペースを利用する際には別個に授業料が発生する。例えばアニメ作りにかかる授業料は200,000～250,000リアル（2,500円～3,200円、レベル初級～上級によって授業料が異なる）である。一方、知性開発センターの図書館で、最初に一定額支払って会員として活動し、特に活発にセンターに通っている子どもたちには授業料経費（絵を描く道具など）と授業料は無料である。しかし多くの子どもたちは、平日には学校に通っていて頻繁にセンターに通うことが出来ないため、図書館の会員として熱心に活動し、授業料を免除されている子どもは非常に少ない。図書館の会員でない場合は、絵を描く道具などを各自で持参しなければならない。

(4) 知性開発センターの職員

知性開発センターは、総会、役員会、専務取締役会、会計検査部、生産部、文化事業部、行政事務及び財務部、外国語公開講座部、売買部、広報部から組織されている。知性開発センターで働いている職員の給料は職歴や専門などによって異なる。次に、知性開発センターで働く教師について述べておく。知性開発センターで働いている教師には、常勤と非常勤の二種類の雇用形態がある。常勤の教師は文化的活動を担い、非常勤の教師は文学・芸術的な活動を担う、というように仕事を分担している。

また、知性開発センターに採用されるためには以下の資格・条件を満たす必要がある。

- 1) 大学で文学、心理学、芸術学について学んだ者
- 2) 25歳～30歳までである者
- 3) 知性開発センターに関心がある者
- 4) 優しくて子どもに関心がある者
- 5) 子どもとのコミュニケーションに長けている者

採用に際しては面接を受けなければならない。面接の際に、志願者の知識と関心が検討される。

2 イランの学校教育制度

イランでは、6歳になると小学校の入学に備えて幼稚園に1年間通う。イランは多民族国家なので、地域によってはペルシア語とそれぞれの民族の言葉の二つを話す子どもがいるが、小学校での教授言語がペルシア語であるため、幼稚園ではペルシア語を学ぶことになる。イランでは、小学校5年間、中学校3年間、高校4年間、大学4年間である。公立学校の場合、高校までの合計12年間の授業料は無料である。小学校から大学までそれぞれ卒業試験に合格しないと上級の学校には進学できない。1979年のイスラム革命後に決められたことであるが、イスラムの戒律によって小学校から高校まで男女は別学である。すべての学校は9月23日が新学年の始まりで、翌年6月20日に終わり夏休みに入る。

それでは、学校教育では補えない教育を知性開発センターが請け負っていると考えられるため、イランの伝統的な学校教育とその問題点と関連させながら検討していきたい。

イランの伝統的な学校教育では、暗記と試験を繰り返す受動的な学習が行われることが多く、子どもたちが実際に体験し、その経験を元にして考察し思考を発展させていくような環境にはなっていない。伝統的な学校教育にはいくつかの問題点が生じている。そのひとつとして、このような学校教育を行っている場合、特に小学校においては、将来生計を立てる上で、実際に役立つ読み・書き・計算を習うだけの場となってしまうことが挙げられる。それでは教育が、教師から生徒への一方通行になってしまい、画一的かつ表面的な教育となってしまう。そのような教育では、生徒の想像力を喚起し、自らの思いやりや発想力を養い、未来を担う責任ある社会のメンバーとして生徒を育てることはできないと考える。また、伝統的な学校教育の方針によると、それが受動的な学習であるがゆえに、情報を身につけるために必要な「経験」を見学はすることができない。知識・情報といったものは、経験をもとにしてこそ、その価値を持つのではないだろうか。経験したこともなく、ただ与えられ暗記するだけの情報は、地に足の着かない不安定なものといえる。そのため、頭に詰め込んだだけの情報は、将来社会に出たときにはほとんど役に立たず、身の回りに多くの情報があふれている現在においては、経験をもとにした応用ができないため、まわりの情報に惑わされることになるのである。

このように、伝統的なイランの学校教育には、いくつかの問題点がある。この問題点を解決するためには、学校が暗記と試験による受動的な学習の場ではなく、そのなかで子どもたちが興味にあふれて活動的な社会生活を営む「小社会」のようであればならないと筆者は考えている。こうした理想

を実現するために、知性開発センターでは様々な活動が行われているのである。イランの学校教育はすべてのニーズに応じることができず、また子どもを教科学習だけでなく全人格的に発達させる機会と可能性が低いことから、充分ではないといえる。知性開発センターの活動は学校外教育として行われていて、子どもを中心とした教育実践を代表するものである。学校教育とは相互補完的な関係にある。イランの学校教育では生徒の精神や能力を育むよりも、成績を伸ばすことに重点が置かれているため、生徒の学力以外の諸能力を培うことは難しい。しかし、学校外教育活動は学校の枠組みの外側で行われ、子どもの側の自発的な欲求や行動、自己表現を重視し、子どもの興味・関心に基づいた教育を行って、子どもの個性や自主性を発達させていく可能性を有している。

3 知性開発センターの活動内容

知性開発センターの活動は、(1) イスラム文化の継承のプログラム、(2) 創作・創造性のプログラム、(3) 世代間交流のプログラム、(4) 国際的な活動のプログラムに分類される。それぞれの活動内容を示すと以下ようになる。

(1) イスラム文化の継承のプログラム

子どもたちにイスラム文化を継承させるための教育と考えられる活動は、主に以下の5つである。

- 1) 物語の読み聞かせ
- 2) 陶芸
- 3) イラン文化展示会
- 4) 文化祭「一週間、知性開発センターと一緒に」
- 5) ラマダン月のお祝いと展示会

1) 物語の読み聞かせ

イランでは、昔から家族が物語や詩を使用して、子どもに道徳的な示唆を伝え、世代から世代へと受け継ぐ文化を伝えてきたが、昨今、マスコミや他のメディア伝達手段は時代とともに進歩したため、物語の読み聞かせという活動の価値は弱まっている。一方で、学校は暗記と試験を繰り返す受動的な学習を行うので、物語の読み聞かせに重きを置いていない。物語の読み聞かせは世代から世代へと受け継ぐ文化を教えることより、子育ての場面でも大いに役立つと考えられる。子どもに物語を読み聞かせる中で、子どもの表現力を伸ばし、愛情を育み、思考力を育て、また創造性を培い、想像力を豊かにしていく。さらに、子どもに本と文学に対する関心を引き起こす。知性開発センターでは物語の読み聞かせを文化的活動として、一週間に1回2時間で行っている。教師は子どもに様々な物語を語ったり、イランの伝統的な習慣・文化を熟知させたり、物語の中で道徳的な教訓を与えたりする。その上で、重要な文化を存続するために10年前から今日に至るまで、物語の読み聞かせを行う文化イベントが行われている。文化イベントの期間は計4日間である。

2) 陶芸

陶芸もまた、人間の古代からの優美な手工芸術であるにもかかわらず、その重要性は人々の間で薄れつつある。陶芸は各地の文明と古い文化の結晶である。また、陶芸の起源はイランであると言われている⁽⁵⁾。陶芸はイランの真正な芸術であるとの認識から、その芸術を保持していくために知性開発センターで陶芸の授業が行われている。授業は一週間に1回、2時間である。授業のレベルは初級、中級、上級がある。その目標は、知性開発センターの子どもたちに、イラン独特の陶芸の古い芸術を熟知させたり、創造力を育てたり、技術の水準を向上したりすることである。陶芸にはイラン人のイスラム文化と文明が息づいているため、子どもの創造力を刺激し豊かにする。それと共に陶器作りを通して、子どもが自分自身に対して自信を持つようになることもねらいの一つである。このように、様々な作品作りを通して創造的発想力を鍛えている。

3) イラン文化展示会

文化展示会は様々な芸術的方法⁽⁶⁾によって、イランの文学、歴史、文明の神話の登場人物、主人公、有名人などを子どもたちに紹介する。そこでは、イランの文化と文明の偉大さを4つの時代（神話時代、古代、イスラム時代、現代）に分けて表現する。センターの教師は、実に巧みにイランの歴史的な人物を紹介し説明する。歴史的、政治的、文学的な人物が紹介されることを通じて、子どもは自分たちの文化の起源を熟知することになる。

イラン文化展示会の目的は以下の通りである。

- ① 子どもの国民的アイデンティティを育て、過去の歴史を熟知させる。
- ② 生まれ育った国に対する愛着と精神的帰属および忠誠の態度を培う。
- ③ 文化と社会からの疎外感を解消する。
- ④ イランの文化と文明に対しての知識を豊かにする。

4) 文化祭「一週間、知性開発センターと一緒に」

知性開発センターでは毎年、「一週間、知性開発センターと一緒に」という一つのテーマを中心とした文化祭が開催される。昨年2006年はペルシア湾をテーマの中心にして、『ペルシア湾、イランの青い心』という文化祭が芸術・文化創造センターで開催された。このテーマは、ペルシア湾の呼称を守るために採用されたテーマである。

文化祭の目標は次のとおりである。

- ① 子どもたちにイランに対する愛国心を涵養し、子どもと青年に国民の良心を大切にして着実に国を発展させる。
- ② 国を守るために協力させ、国土の防衛に献身的な態度を向上させる。
- ③ 子どもにイランの政治境界、文化境界、地理境界を熟知させる。

国を愛する心とは人が自然に持っている国に対する愛着心に気づき、積極的に国づくりに参加する心であり、そして自国に誇りを持ち、歴史や伝統・文化を大切にする心である。

5) ラマダン月のお祝いと展示会

知性開発センターでは、毎年ラマダン月（断食月）のお祝いが行われている。ラマダンとは、イスラム教徒の断食が行われる月で、イスラム暦（太陰暦）の第九月にあたる。この月に、神が初めて使徒ムハンマドに啓示を授けられたのだが、そのことを忘れないために、毎年ラマダン月の1ヶ月間（新月が現れてから次の新月が現れるまでの29日又は30日の間）、夜明けから日没までの断食が義務づけられている。青年と子どもたちは、ラマダン月お祝いに参加して楽しい時間を過ごす。また、飢えや貧困で苦しむ気持ちを忘れないように断食するため、この期間は、貧しい人々に食べ物を与えたり、施しを与えたりすることが勧められている。ラマダン月のお祝いの目的は以下のとおりである。

- ① 子どもと家族に楽しい時間を作り出す。
- ② 子どもに楽しい環境でラマダン月のことを熟知させる。
- ③ 信心を深く感じさせる。
- ④ 良い思い出によって宗教への興味・関心を定着させる。

(2) 創作・創造性のプログラム

知性開発センターで行われる創作と創造に関する活動は、主に絵画（個人：壁画，印刷，パステル絵画＋グループ絵画：コラージュ），アニメ作り，演劇の三つである。各活動は、イスラム文化の継承プログラムと同様に、一週間に1回，2時間で行われている。各クラスの生徒人数は15～20人で、年齢は4歳～16歳までである。

(3) 世代間交流（出会いと友情プログラム）

知性開発センターは、センターを卒業した大人たちと子どもたちが交流できるプログラムも提供している。知性開発センターで学んだ芸術に関する活動が、どのように将来に役立つのかを子どもたちが知ることができる。また、イランから国際的に活躍する人材の輩出を目指しているため、現在芸術的な分野で活躍している卒業生を招いて行う。

(4) 国際的な活動

知性開発センターで行われている主な国際理解教育活動は以下のとおりである。

- 1) イランとオランダの国際文化交流プログラム
- 2) ヨーロッパの国際文化祭
- 3) 国際文化祭『子どもの喜び』

以下にそれぞれの国際文化的な活動について具体的に説明していく。

1) イランとオランダの国際文化交流プログラム

プログラムの概要

オランダの王立博物館では、2年半おきに9～12歳のオランダ人の子どもを対象に、非ヨーロッパ

人の習慣に触れる機会を提供している。2003年9月から2006年3月まで、王立博物館は知性開発センターと協力して、オランダ人の子どもに、イランの習慣と言語に親しみをもたせるプログラムを実施した。イランとオランダの国際文化交流プログラムが行われるにあたって、オランダのデ・クラール小学校⁽⁷⁾の生徒の中から16人と、アサボ小学校⁽⁸⁾の生徒の中から16人、そしてイランの知性開発センターのメンバーから男女34人が交流メンバーとして選ばれた。国際文化交流プログラムは、主にテヘラン市内の知性開発センターの第15号図書館で行われた。

この2年半の期間に、オランダの子どもがイラン人の服装をしたり、料理を食べたり、歴史や習慣、言語などについて調べたり、イランの子どもとインターネットで連絡を取り合ったり、プレゼントや写真を送ったりという活動を行った。同様に、イランの子どもも、多様な活動を通して、オランダの習慣や文化を体験した。この国際交流プログラムの目的は、イランの子どもが、オランダの習慣や生活様式などを知り、自文化や他文化の理解を深め、お互いの相違点と共通点を認識し、相互の理解や尊重を深めること、また、オランダの子どもにもイランの文化・言語・習慣を熟知させることである。

国際文化交流プログラムに関して行われた活動は、以下の三つのグループに分けることができる。

① 自文化と他文化交流

- 1-1 イラン人の子どもたちが、自分たちが暮らしている家について調べる活動
- 1-2 住んでいる地域の特徴について視覚的に調べる活動
- 1-3 地域にある美しい建物を見学する活動
- 1-4 贈り物についてディスカッションする活動
- 1-5 オランダのシンタクラス祝祭を紹介する活動
- 1-6 イランの冬至の夜について説明する活動
- 1-7 預言者である子ども（イエス様）の生活について説明する活動
- 1-8 イランのバムで⁽⁹⁾起きた地震について調べる活動
- 1-9 在テヘランオランダ人学校を訪問する活動
- 1-10 イランの宗教と国民的習慣（モハッラム月⁽¹⁰⁾ アーシューラ⁽¹¹⁾
- 1-11 イランの新年を迎えるための大掃除
- 1-12 イランの新年の祝祭⁽¹²⁾とチャールシャンベスリ⁽¹³⁾
- 1-13 イランの新年の祝祭で行う相互訪問とお年玉
- 1-14 イランのピクニックの日⁽¹⁴⁾に行われた活動
- 1-15 フェルドウスイーと⁽¹⁵⁾『シャー・ナーメ』

② 写真展示会

- 2-1 両国の写真家によって撮影された相手国の紹介
- 2-2 両国の子どもが様々なところで撮影した写真

③ 家庭訪問

イランとオランダの国際文化交流のプログラムで活動したオランダ人の子どもが、2006年3月3日、イラン人の友だちに会うためにイランを訪れた。そして、イラン人の友だちの家庭を訪問するために、グループに分かれて、イラン人の友達の家を訪問した。そこでイランの家庭の文化や習慣に実際に触れたり、イランのお菓子や料理を食べたり、紅茶を飲んだり、趣味について話したり、お土産を交換し合ったりした。

2) ヨーロッパの国際文化祭

プログラムの概要・目的

ヨーロッパの国際文化祭は、子どもの芸術的・文学的な才能を育てるために、普段あまり触れることのできない異文化と出会うこと、また子どもにヨーロッパの現代文学に親しみをもたせることを目的として、イランの新学期⁽¹⁶⁾の始まりである2004年9月23日から17日間にわたって、知性開発センターにおける芸術・文化創造センターで行われた。この国際文化祭には、ヨーロッパの国々⁽¹⁷⁾から来た有名な子ども向けの物語作家、挿絵画家、演劇俳優、各国の大使と国内の有名な子ども向けの物語作家、挿絵画家がおよそ60人参加した。このヨーロッパ国際文化祭は、オーストリアの文化センターである「X change」と知性開発センターが協力して開催した。

ヨーロッパ国際文化祭に参加するイランの知性開発センターの子どもたち（約2500人）は、小さい物語を書くコースと絵を描くコースの二つに分かれて活動を行った。子どもたちはテヘランの各知性開発センターの工作スペースで一日2時間作業を行った。ヨーロッパ国際文化祭には8～12歳の子どもの子どもたちが参加して、工作スペースでヨーロッパ人の教師の物語に対して絵画を描いたり、絵画に対して作文を書いたりして、創造力を養った。

3) 国際文化祭『子どもの喜び』

プログラムの概要・目的

「子どもの喜び」という国際文化祭は2005年の11月13日～16日（4日間）、芸術・文化創造センターで行われた。イラン、ドイツ、フランスの子どもに相互に「外国語」と「異文化」に親しみを持たせ、交流を深めるために開催された。国際文化祭の目的は、まず子どもたちに外国語に触れる機会や外国の生活・文化などに慣れ親しむ機会を与え、外国語に対してイランの子どもが持っている「難しい」というイメージを取り除くことである。

イランの学校では、中学校から徐々にアラビア語の学習を始めて、英語の読み書きなども勉強を開始する。高校ではより力を入れ、生徒は単語や複雑な文法などを覚えるようになる。しかし、この点は日本で行われている英語教育と欠点が共通しているように思われるところだが、会話ができるようになるための学習内容は非常に乏しい。したがって、ペルシア語と比べて、英語など外国語に対して「難しい」「話せない」といったコンプレックスを持っている子どもたちが多いのも事実である。日本

でもしばしば話題にのぼる英語教育の重要性は、イランの小・中学校においても同様に考えられている。将来、イランから国際化社会で活躍する人材を輩出するために、英語や外国語習得の必要性が認識されている。

このプログラムにおいては、ちょうど外国語を学び始める前の小学校、高学年の子どもたちに対して英語への先入観を取り除くことが目指されている。中学生は、アラビア語や英語を学び始め、ちょうど英語に対する苦手意識やネガティブなイメージを持ち始めている時期なので、このプログラムに参加することでそういった姿勢を変えていこうという意図がある。

おわりに

イランにおける知性開発センターは、学校教育では重視されていない、芸術的・創造的な分野を中心として、教師が子どもを主体的な学びを尊重した活動が行われている。知性開発センターは、ペルシア語によるイスラム文化の継承という一元的な側面で実践されていることは事実であるが、子どもの主体性・自立性を育むだけでなく、子どもを対象とした国際交流の機会を設けているイランで唯一の施設としても非常に注目すべき存在である。

知性開発センターが設置されるまでは、イランの国内や学校周辺に子ども向けの図書館や文化的な活動のできる場所は非常に少なく、公教育施設に付属する図書館数はほんのわずかであった。センター設置後の現在でも、学校教育では進学競争が依然として激しく、知識を詰め込む教育が重視されてきたため、音楽・美術・図工など、主要教科以外の芸術分野に関する教育については手付かずの状態である。すなわち、子ども自身が学びたいと思うこと、手を使って何かを作ったり、身体を動かして体験したり、自分の目で見、耳で聞き、新しいものを創り出していくという体験は学校の中にいる限り不可能なことなのである。しかし、近年、子どもが本来持っている潜在的な才能・独創性を育むための芸術的な活動、学校生活の中で協調性の身につけにくい子どもたちを、集団的な活動の中で変えていこうという活動を取り入れたプログラムのニーズが次第に高まってきている。こうした背景の下で、子どもの学校以外の時間を充実させる機関として知性開発センターが設立されたのである。

このように子どもが公共の施設でのびのびと過ごす時間が充分に取れない状況ではあるが、知性開発センターでは、イランの社会において子どもたちの休日の時間を充実させることが大切だと考えられている。それは、余暇の時間を友達と楽しく過ごし、様々な身体を使った活動を通して心身の健康が保たれ、芸術的な創造力を育み、少年犯罪などの問題への解決の糸口を発見する可能性があると感じられているからである。

参考文献

アフマド・サーフィ『イランの教育制度—ایران پرورش و پرورش آموزش و قوانین آموزش』1994、テヘラン大学。

大津和子、鈴木理明『国際理解教育』1992 国土社。

アボルファーズ・バーラムプール『イランの教育制度にある欠点を検討する-در ایران نقدی بر ناکارآمدی آموزش و پرورش』2003 ズィーバ社。

オーストリア X change 文化センター 『アシェガーネ』 『عاشقانه』 2005 カルチャー&サイエンス社。

モルテザー・ハルハハリ 『イランのカリキュラム制度』 『نظام برنامه آموزشی ایران』 2002

ソーガンド社。

『一目でセンターの活動』 『کانون در یک نگاه』 (毎年一回、出版される。) 1993年号～1997年号と2001年号、2002年号、2004年号 知性開発センター社。

『センターの会報』 『کانون خبرنامه』 (2ヶ月おきに出版される) 2005年号 (No.4.5) 知性開発センター社。

注(1) 1979年、亡命先のフランスからホメイニ師が人々の熱狂的な歓迎を受けて帰国した後、パーレビ朝による王政がほろび、イスラム革命が成功した。

(2) 『Introduction』 知性開発センター出版、1966年、p. 3.

(3) テヘランの中央部に位置する公園で、イラン革命前の女帝の名前からつけられた。革命後はラーレ公園という呼称に変わった。

(4) テヘランの南部に位置し、低所得者層が多く居住する町である。

(5) 陶芸の歴史については、ウェブサイトを <http://www.chn.ir/News/?section=2&id=24011> (2006年09月16日) を参照した。

(6) 例えば、絵画、グラフィックアート、書道、看板・模型作りなどが挙げられる。

(7) デ・クラール小学校は、非ヨーロッパ人の生徒が在学する学校である。

(8) アサボ小学校は、オランダ人の生徒のみが在学する学校である。

(9) バム (Bam) はイランの南東部ケルマーン州に位置する人口およそ80,000人の都市である。古代の要塞都市アルゲ・バムが北東近郊にあり、砂漠のエメラルドと呼ばれることもある。

(10) イスラム暦第1月。

(11) イスラム暦第1月、モラッラム月の10日 (イマーム・ホセインがカルバラーで殉教した日)。

(12) イランの新年は3月21日である。

(13) 最後の水曜日の夜に火の上を跳んで無病息災を願う風習である。

(14) 新年から数えて13日目は、スイーズダベダルというピクニックの日である。イランでは13という数字が嫌われるため、13日目に家にいるのは縁起が悪いため、すべての人がピクニックに出かける。

(15) フェルドウスィーはペルシア民族詩人 (935-1020) である。

(16) イランの学期制は2学期制である。1学期は9月23日～3月19日までである。2学期は4月4日～6月21日までである。

(17) 国際文化祭に参加した国々は、オーストリア、フィンランド、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、オランダ、ベルギーの7カ国である。